

ラストの光景は感動的。

愛され続けていく作品

売れてる本

■星を継ぐもの
ジェイムス・P・ホーガン(著)

謎解くごとにカタルシス



獲得。今年には訃報が報じられたのち、2度増刷がかかっている。SFの中でも、科学的論理に重きをおいた「ハードSF」にカテゴライズされる。確かに派手な事件が相次ぐ展開ではなく、科学者たちのティスカッションにページの大半が割かれる。が、これが実にエキサイティング。言語学や生物学の説明も丁寧で分かりやすく、謎がひとつ解けるごとに得られるカタルシス。そこから新たに生まれる疑問への興味で読者をひきつける。本書をミステリーだと

評する人がいそいそと納得。人類進化のミッシングリンクの謎にまで解答が与えられる着地点。ラストの光景は感動的ですから、ホーガンはとりわけ日本人で人気が高い。はじめてSFを読む人でも手にとりやすいスタンダードであることに加えて、科学者が明るい未来を切り開いていく、という著者の楽観的なビジョンが支持されているのかもかもしれません。この一冊でも十二分に満足できるが、続編も執筆されており、作品世界は広がりを見せていく。折しもノーベル化学賞が話題となっているが、科学の楽しさを伝える作品としても、愛され続けていくだろう。(池央歌訳、創元SF文庫11735円、81刷28万部)

瀧井朝世 (ライター)

読書

今年の7月、人気SF作家のジェイムス・P・ホーガンが逝去した。まだ69歳だった。本書は彼のデビュー作にして出世作である。時は2020年代。月面で一人の男の死体が発見される。緻密な

検証により、彼はなんと5万年も前に死亡したと判明。なぜそんな大昔に人類と同じ遺伝子情報を持つ生物がいたのか。彼は地球人なのか、それとも？ 国連宇宙軍に集結した科学者たちが研究の限りを尽くして謎の解明に挑む。作品の発表は1977年。80年に邦訳が刊行されると爆発的なヒットとなり、翌年の星雲賞海外長編部門を受賞。以来30年にもわたる読み継がれ、昨年には「創元SF文庫を代表する一冊は何か？」という読者アンケートでも1位を

瀧井朝世

朝日新聞朝刊

(2010年10月10日掲載)